

二〇二〇年度 東北大学前期試験 国語解答・解説及び配点予想

※ここでは国語を100点満点で考えています。学部学科によって満点が異なることも考えられますが、配点のポイントは共通であると考えられます。

一【現代文】（論説）

【解答例】

問(一) (1) 魅力 (2) 促 (3) 示唆 (4) 派生 (5) 罰

問(二) 大人が何の考えもなく、子どもに客観的価値を伝えるような行動。(三〇〇字)

問(三) 個人の好みとは別の次元に、客観的な価値基準が存在すること。(二九〇字)

問(四) 二つの能力は進化の過程で同時に獲得され、相補的な関係にある。(三〇〇字)

問(五) ヒトは利己的であるだけでなく、他者から一般的な知識を学び、それを他者に教えるという相補的な能力を生物学的に持つことで、「公的」な世界と「私的」な世界の折り合いをつける動物である。(八九字)

【配点予想】（三十点）

問(一) 1点×5 解答通り

問(二) 5点 ポイント以下の通り

a 大人が意図していない(自然な)行動 2点

b aを通して客観的価値を子どもに伝える 3点

※ aのみでは不可。

※ 末尾の句点を脱した場合、一点減(以下同じ)。

問(三) 5点 ポイント以下の通り

a 客観的な価値基準の存在 3点

b aは個人の(自分の)好みとは別次元 2点

※ 具体的な説明の場合、全体で3点

問(四) 5点 ポイント以下の通り

a 二つの能力について触れている 1点

b 両者の関係を説明している 4点

※ aのみでは不可。

問(五) 10点 ポイント以下の通り

- a ヒトは利己的存在というだけではない 2点
- b (ヒトは)学び教える能力を持つ 2点
- c bにより客観的知識(一般的価値)をもつ 3点
- d 「公的」世界と「私的」世界の折り合いをつける 3点

※ aのみでは不可。末尾「ゝ動物」を脱した場合1点減。

【解説(総合)】

安藤寿康「なぜヒトは学ぶのか 教育を生物学的に考える」からの出題。ヒトは学び教える能力を生物学的に持つており、それによつて公私の世界の折り合いをつけるという特徴を持つ動物であることを述べる。本文の長さど設問数は例年通りだが、やや指定字数が厳しいためポイントを絞つた答案作成能力が求められる。

【解説(設問ごと)】

問一 漢字問題。標準的なものである。

問二 傍線部「大人の側では『教育』などと思っていない何気ない行動」がどのような行動を指すのかを問われている。5ページ6行に「自然の教育」の語があり、ここの前の文脈が説明。

問三 傍線部の「実験」の結果は子どもが何を学んだことを示しているかを問われている。やはり5ページ4行に「(子どもは)自分の好みとは別次元の客観的・普遍的価値基準をゝ大人のふるまいから察し」とある。ここが答え。

問四 傍線部「教える能力と教わつて学ぶ能力」の関係を筆者がどう捉えているかを問われている。直後の文脈に説明されている。

問五 筆者が「ヒト」をどのような動物ととらえているかを本文全体の内容を踏まえて説明する問い。本文末尾に「ヒトはゝ動物なのではないか」とあるのでここを中心として、さらに指定に沿つて、ここまでの問いの内容を含めてまとめる。

二 【現代文】（小説）

【解答例】

- 問(一) (1) ひどく突然に
(2) まじめな練習

問(二) 列車が時間にしたがって走るのではなく、時間をひろい集めているのだという考えが浮かんだこと。(四五字)

問(三) パリでの時間を離れ、記憶の中の異質な時間を感じたい思い。(二八字)

問(四) 物事を時間の流れに沿って縦にまとめるだけではなく、異質で断片的な様々な要素をひろい集めて人間の世界にまとめたもの。(五七字)

問(五) 他の人が若い時に理解している「物語」の語り方を、老いてから必死に探し求めているということ。(四五字)

【配点予想】（三十点）

問(一) 3点×2 ニュアンスが合っていれば可

問(二) 5点 ポイント以下の通り

a 列車は時間にしたがっているのではない 2点

b 駅の時間をひろい集めて走っている 2点

c a・bを思いついたこと 1点

※ cのみでは不可

※ 末尾の句点を脱した場合、1点減(以下同じ)。

問(三) 5点 ポイント以下の通り

a パリの時間から離れたい 2点

b 旅の途中での記憶の時間を感じたい 3点

問(四) 8点 ポイント以下の通り

a 時間を縦軸に沿ってまとめたもの 3点

- b aとは異質な断片的な時間を取り入れる 3点
 c a・bを人間的な物語にまとめる 2点

※ aのみでは不可。

問五 6点 ポイント以下の通り

- a 前半の比喩を説明している 3点
 b 後半の比喩を説明している 3点

【解説(総合)】

須賀敦子「となり町の山車のように」からの出題。自分の経験を通して、物語には縦糸の時間と横糸の時間を統合することが大切であることを述べる。本文の長さで設問数はほぼ例年通り。設問の指定に注意が必要。

【解説(設問ごと)】

問一 語彙問題。標準的なものである。

問二 傍線部「旅が退屈ではなかった」とさせたものを答える問題。直前の文脈をまとめればよい。ここでも出てくる「時間」についての構造が全体の構造になっている。

問三 傍線部「帰りがかった」に込められた「わたし」の思いを問われている。「込められた」の指定は、表面的な内容ではなく、全体の構造に関わる問いであることを示す。

問四 「私」の考える「いい物語」の内容を答える問い。直前・直後の文脈をまとめればよい。ここでも「縦の時間」と「横の時間」が対比的に述べられていることに注意。

問五 傍線部の比喩表現の意味を答える問題。直前の文脈をまとめればよい。

三 【古文】

【解答】

問(一) (1) それ相당한高い地位にある人々

(2) 物事がよく分かっている人

問(二) 平安京と福原とどちらが優れているか、議論をして決めよう

問(三) 藤原長方の、皆が恐れる清盛に対してただ一人遠慮せず、福原を非難し平安京の良さを述べた言動。(四十五字)

問(四) 新しいことを行った者は、それを後悔している場合、人に意見を求めるものだと中国や日本の先例に鑑みて、平清盛も福原への遷都については後悔していると確信したから。(八十字)

問(五) 知識をふまえた思慮深さと大胆さへの称賛。(二十字)

【配点予想】(二十点)

問(一) 1点×2 計2点

問(二) 4点

・「いづれかまされる」を「どちらが優れているか」「どちらが勝っているか」などと訳す。(2点)

・「いひさだめをせむ」を「議論をして決めよう」「話し合って決めよう」「評定しよう」などと訳す。(2点)

問(三) 4点

・「誰の」は「藤原長方(長方卿)の」。(2点)

・平清盛に遠慮しなかったことを指摘。(1点)

・福原を非難し、平安京の良さを述べていることを指摘。(1点)

問(四) 6点

以下の内容が指摘されていればよい。

・新しいことを行った者がそれを後悔している場合、人に意見を求めるものであるということ。(2点)

・中国や日本の先例を参考に行っていること。(2点)

・平清盛が福原遷都を後悔していると、長方が確信していること。(2点)

問(五) 4点

- ・知識をふまえた思慮深さについて指摘している。(2点)
- ・大胆さを指摘している。(2点)

【解説】

鎌倉時代初期の説話集『続古事談』(編者不詳)からの出題。一昨年・昨年に続いて本文全体の大意は分かりやすい。ただし、設問を解くには字数におさめる文章力と、高度な語彙力が求められる。

問(一) (1) 「さもある」は、「さもあり」(いかにももつともだ)の連体形。

「さもあり」は指示副詞「さ」＋係助詞「も」＋動詞「あり」の連語。

「いかにももつともである人」「その場にいるのにしかるべき人」などでも良いだろう。

(2) 「ものおぼゆ」は本来「意識がはつきりする」「もの心がつく」などの意だが、今回は文脈から「物事がよく分かっている人」「思慮深い人」などの意が妥当。

問(二) 「まされる」は、ラ行四段活用動詞「まさる」の已然形「まされ」に、完了存続の助動詞「り」の連体形「る」が付いたもの。

「いひさだむ」は、「話し合って決める」や「口約束をする」などという意の語で、今回は前者の意である。

問(三) 一段落目の後半の内容をまとめる。「ところを置かず」は「遠慮せず」という意味。

問(四) 理由を聞かれているのだから、傍線部直後の「そのゆるは」以降をまとめればよい。

問(五) 最後の問題なので、本文全体の内容をふまえる。これまでの設問の解答をまとめればよい。

【全訳】

六波羅の太政入道（平清盛）が、平安京から福原に都を遷して、人々が皆新しい都に移り住んでのち、思いの外に時が経ってから、『古い都（平安京）と新しい都（福原）とどちらが優れているか』について議論をして決めよう」といって、古い都に残っているかにももつともだと思われる人たちを全員呼びよせたところ、人々はみな太政入道の心を恐れて、自分の思っていることを言うものはいなかった。（ところが）長方卿だけは少しも遠慮をせず、この都を非難して、言葉も控えず容赦なく厳しいことを言った。そして、もとの都の良いところを言って、ついにその日のうちに、その人の評定によって、福原から平安京に都を戻すべきだということになった。

後に、その評定の場にいた上達部が、長方卿に会って、「それにしても驚いたことだなあ。あれほど我が強い人（である太政入道）が『素晴らしい』と思つて建設した都を、（あなたは）あれほど（激しく）どうして非難されたのか。（うまく）説き伏せて（平安京への）遷都の決定があつたからよかつたものの、（太政入道が）どうしようもなく腹を立ててしまったなら、どうなさつたのですか」と言つたところ、「このことについて、（あなたの考えは）私の考えとは違うのです。（私はむしろ）『入道の考えに合うだろう』と思つて、そのように言つたのです。そのわけは、広く中国や、我が国（の例）を照らし合わせて考えてみると、良くない新しいことを行った者は、はじめ思いついたときは、かえつて人に相談するということはありません。その所業に少し後悔する思いがあるときに、人に尋ねるのです。この場合もあの都に、思いの外に長く住んで後、二つの都の評定を行ったので、『実は、この（遷都の）ことを後悔していたのだなあ』ということが分かつてしまいました。そういうことなので、どうして言葉を控えるべきだったでしょうか、いや、控える必要などありませんでした」と言われた。

事実、後に（長方卿が）ある人に（官位を）超えられそうになった時も、この入道が（長方のために）良いように（帝に）申し上げて、「長方卿は、思いの外にももの道理が分かっている人です。簡単に人に（官位を）超えさせてはいけません」といって、後々まで味方をされたそうである。

「梅小路中納言の両京の評定」といって、当時の人々の評判となつたそうだ。

四 【漢文】

【解答例】

- 問(一) (1) あざなは (2) かつて
- 問(二) 試験の合格者名簿の中に孫貫という名があるかどうかを質問すると、
- 問(三) 夢で「抃」という合格者がいると聞いたので「貫」から改めた。(二九字)
- 問(四) ウ いまだもってしんとなさずといえども、
イ ただせいゆうがくしにしかざるのみにして、
- 問(五) A 人の欲は限りのないものだという感想。(二八字)
B 孫抃が、翰林学士に任じられる夢を見た時は喜んだのに、実際に任命されると不満を感じたと聞いたから。(四八字)

【配点予想】(二十点)

- 問(一) 1点×2 解答通り
- 問(二) 4点 ポイント以下の通り
a 指示語「其」の内容に触れているか 2点
b 「否」のニュアンスを訳せているか 2点
- 問(三) 4点 ポイント以下の通り
a 夢で「孫抃」という名の合格者がいると聞いたから 2点
b 名前を「貫」から「抃」に改めた 2点
- 問(四) 2点×2 解答通り
- 問(五) A 2点 方向が出ていれば可
B 4点 夢のお告げを聞いた時の心情と、実際に任命されての心情を過不足なく説明できているか

【解説(総合)】

范鎮「東齋記事」からの出題。重臣の孫抃が夢のお告げの通りに出世したことについて述懐した内容を述べる。本文の長さや設問数はほぼ例年通り。特に難読構文もなく、標準的な問題である。

【解説(設問ごと)】

- 問(一) 字訓問題。標準的なものである。
- 問(二) 傍線部の口語訳。句末の「否」は「いやいなや」と読み、「さかどうか」という疑問構文となる。
- 問(三) 傍線部の内容と理由を問う。直前を読めていれば出る。
- 問(四) 訓読問題。共に二つの基本要素を組み合わせて出題されている。すなわちウでは「未(いまだくず)」と「以為(くをもつてくとなす)」が、エでは「但(ただくのみ)」と「不如(くにしかず)」の組み合わせである。
- 問(五) 傍線の箇所について、感想の内容とその理由をそれぞれ問われている。ここまでの内容が読み取れているか。

【通釈】

参政の孫夢得どのは最初は名を貫、字は道卿といった。以前私に次のように語った。「私が進士試験を受けに長安を通った時、夢で一卷の大きな巻物を持った人を見た。(それは何かと)彼に問うと『来春の合格者名簿だ』というので見せて欲しいと頼んだが許されなかった。(そこで)名簿の中に孫貫の名があるかどうかを問うと、『いない。第三位に孫朴という名があるだけだ』。そこで目が覚めて、名前を抹とし、字を夢得と改めた。さらに数日して華陰県に来た時に、数人の仲間と金天帝の社に参詣してご利益をお願いして夢見を待った。(すると)夜中に明るい窓辺で皇帝の詔勅を起草している夢を見た。仲間たちは祝ってくれて『きっと将来(皇帝の文書を起草する)知制誥翰林学士になるだろう』と言った。(私は)まだ信用はしなかったが、ひそかに喜んだ。翌年、三位で試験に合格し、その後集賢院知制誥となったのは夢の通りだと言えり」と。さらに言うには「私は最初にこの夢を見た時はとても喜んだが、実際に翰林学士になって見ると、大変に嫌だった」と。人の欲は限りのないものである。この時孫夢得はすでに参知政事となっていた。(この職は)給料こそ少しは手厚くなっているものさして翰林学士と変わらず、官位の格式は学士に及ばない上に仕事の責任は学士よりずっと重いのである。